

サポクラ 通信

令和5年(2023年)1月号

今月の内容は...

- ・オオカンガルーの体重測定1
- ・レッサーパンダ「小百合」来園4
- ・熱帯鳥類館の賑わい6
- ・ホッキョクグマ ホクトの来園11

オオカンガルーの体重測定

円山動物園サポートクラブの皆さまこんにちは。

私はカンガルー担当の吉田です。

新年最初となる1班からのお便りでは、毎月実施しているカンガルーの体重測定について紹介します。

体重測定の本来の役割は、動物の健康を守るためです。

動物の健康状態を把握するうえで必要な行為で、動物にほとんど負荷をかけることなく行えます。

どんな生き物でもそうなのですが、体重を正確に把握することができれば、餌の量や治療が必要になった場合の投薬量をより正確に決めることができます。

それでは、オオカンガルーの体重測定の様子をご覧ください。



体重測定の準備をしていると、
好奇心旺盛なカンガルー達は、
みんな集まってきます。



体重計を設置します。大型の動物の体重を測定するには、
このように 2 本のバースケール(体重計)に、
大きな板を乗せて使用します。



最初は1頭ずつ部屋に入れて計ろうとしましたが、時間もかかるし警戒してなかなか計る事が出来ませんでした。そこで群れで生活している動物なので群れごと部屋に入れたところ警戒せず上手く計ることができました。



1頭ずつ餌で誘導して計ります。

この個体は去年の4月に体調を崩して21 kgまで下がってしまいましたが、特別食としてサツマイモを小さく切って与えたところ、9か月で元の体重に戻す事ができました。

円山動物園サポートクラブのみなさま、いつもありがとうございます。
レッサーパンダとヒマラヤグマを担当している大野です。
今回は新しく来園したレッサーパンダの小百合についてのお話です。

小百合来園

令和4年11月2日、秋田市大森山動物園より、
レッサーパンダの小百合が来園しました。
昨年の換毛がうまくいかなかったようで、
来園当初は背中や尻尾の毛が薄かった小百合ですが、
今は徐々にではありますが、被毛が生えてきています。
竹の葉を非常によく食べる個体ですので、
4kg台だった体重も6kg台に増え、円山のレッサー
パンダたちの中で1番大きくなっています。

担当者からみた性格は、わりとぼーっとしている一面も
ある個体なのですが、給餌のために放飼場へ入ると
飛びかかってくることもあり、非常に食いしん坊なところもあります。
大森山動物園では母親と同居していたということもあり、円山での単独の生活はまだ慣れていない様子も
伺えますが、暖かく見守っていただけると幸いです。



円山での初めての冬。

来年度は、繁殖に取り組んでいきたいと思いますので
よろしくお願いいたします。



サポーターの皆さまのご支援で屋内放飼場の橋の改修が終わりました。

今後、床の改修が済み、馴致ができ次第、使用してまいります。ありがとうございました。



ヒマラヤグマ

本来なら冬のこの時期冬眠しているはずのヒマラヤグマですが、冬でも元気に過ごしています。ヒマラヤグマは非常に嗅覚が優れており、土の中にある昆虫などの匂いなども嗅ぎ分けることが出来るとも言われています。雪の中に隠した餌もなんなく見つけてしまうトモ。しかしながら高齢なこともあり、除雪されていないところには行かず、天気が悪い日は屋内で過ごすことが多いようです。今年も元気に過ごしてくれるといいな～。



熱帯鳥類館の賑わい

円山動物園サポートクラブの皆様、熱帯鳥類館の飼育担当をしている高橋です。
本年もよろしくお願いいたします。

2023年1月現在、熱帯鳥類館では鳥類8種類とアカハナグマを飼育しています。そのうちセイキムクドリとベニイロフラミンゴでは昨年繁殖に成功しました。
そこで、今回の記事では「セイキムクドリとベニイロフラミンゴの繁殖と成長」、「フラミンゴの個体の見分け方」、そして「バックヤードで飼育中のサトウチョウについて」をご紹介します。

「セイキムクドリのヒナ やんちゃに成長！」

2022年7月31日にセイキムクドリのヒナが1羽巣立ちました。

巣立ち直後のヒナは、飛ぶための風切り羽や尾羽が親鳥の半分ほどの長さしかなく、30cmほどしか飛び上がれません。しかし、巣があったのは天井近くの鉄骨の間、巣立ちの時は飛び立つと言うより羽ばたきながら落下した、、、のかもしれないね。その後は親鳥に見守られながら、少しずつ生きるすべを教えてもらい、飛び方や餌の食べ方、警戒の鳴き声など様々なことを経験しています。時々、コオロギに驚いて飛びのいたり、フラミンゴの羽を上から落として追いかけたりと、子供らしい好奇心旺盛な一面もみられます。



見た目は大人と変わらなくなってきましたが、まだまだ行動には幼さが見られます。つい見逃してしまいそうな行動も理由を想像してみると興味深く面白いものです。
順調に成長してくれていて、現在ではオニオオハシとともにバードホール内を縦横無尽に飛び回っています。

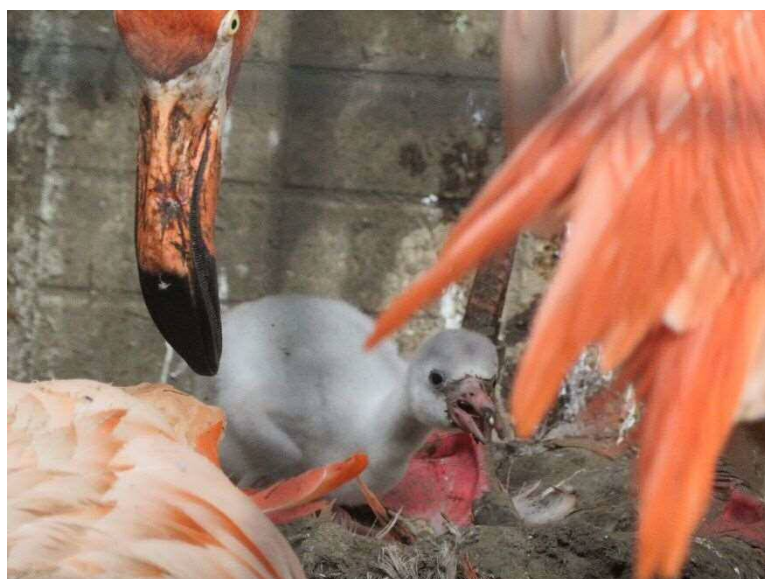
2023年1月現在のヒナ（もうヒナではないですね）

春先によく、鳥のヒナが保護されています。多くの場合、セイキムクドリのヒナのように親鳥から生きるすべを教わっている途中に、保護という名目で連れて帰ってしまうことがあります。心配でしょうが、すぐに捕まえるのではなく、そっと観察をしていると親鳥が餌をあげたり寄り添っていたりと、ほほえましい光景を見ることができるかもしれません。



「ベニイロフラミンゴのヒナ ぐんぐんと成長中！」

2022年9月14日にベニイロフラミンゴが1羽孵化しました。当園では3年ぶりの繁殖。



生まれてすぐは、親の顔と変わらぬほど小さく、フワフワした羽毛で覆われています。しかし、フラミンゴの成長はとても早く、みるみるうちにぐんぐんと大きくなっていきました。孵化したばかりの頃は短く真っ直ぐだった嘴も生後1か月頃には曲がり始め、2か月後には成鳥と同じ形になりました。

↑父親と孵化当日のヒナ

両親の熱心な子育てにより、頭の羽はうっすらピンク色になり、年が明けてからは幼羽が抜け始めました。体重も 4.41kg と大きく成長しています。

フラミンゴは雄雌両方が、体内で作られるフラミンゴミルク（栄養のある赤い色の液体です）を口移しで与えて育雛（子育て）をします。最近父親は体の色が白くなっています。フラミンゴミルクをヒナに与えすぎたため、自分の羽を赤くするための赤い色素が足りなくなってしまったのでしょうか、、、子育て熱心な父親を私も見習いたいものです。



左から母親、ヒナ、父親

「フラミンゴの個体の目印」

たくさん飼育しているフラミンゴですが、飼育担当者は1羽ずつ見分けています。個体を見分けることを個体識別と言いますが、鳥類では主に足に目印（足環）をつけることにより見分けやすくしています。

フラミンゴでは足にカラフルな輪っか（色環）を付けて見分けています。例えば「左足黄色メス、右足白色オス」のように。



↑保定し、色環を装着

昨年生まれたベニイロフラミンゴのヒナにも色環を付けました。成長途中で足環や色環をつけると、後に足に食い込んでしまうことがあるため、大きくなってから装着しました（他の鳥類ではヒナの状態で大きめの足環を付ける場合もあります）。

ヒナには右足にオレンジの色環を付けました。ご来園した際には、ぜひ、フラミンゴの足にも注目してみてください。

「サトウチョウの現在とこれから」

サトウチョウは現在バックヤードにて飼育しており、2羽とも元気にしております。以前は熱帯鳥類館内にあるケージにて飼育していましたが、ケージの修理のため、また、ケージを先ほどご紹介したセイキムドリ

のヒナの避難場所としても使用していたため、鳥かごで飼育中です。鳥かごに目隠しとして人工芝を貼り、リングを引っかけたり、齧るためのコルクを付けたり、狭い鳥かごですが、少しでも楽しめるようにしています。

修理が終了したので熱帯鳥類館内のケージへ戻す予定ですが、冬場のため館内の室温が安定せず、もうしばらく様子を見ることになりそうです。

ご来園者のみなさまにおかれましては、サトウチョウがケージに戻りましたら、そっと見守っていただけたらと思います。





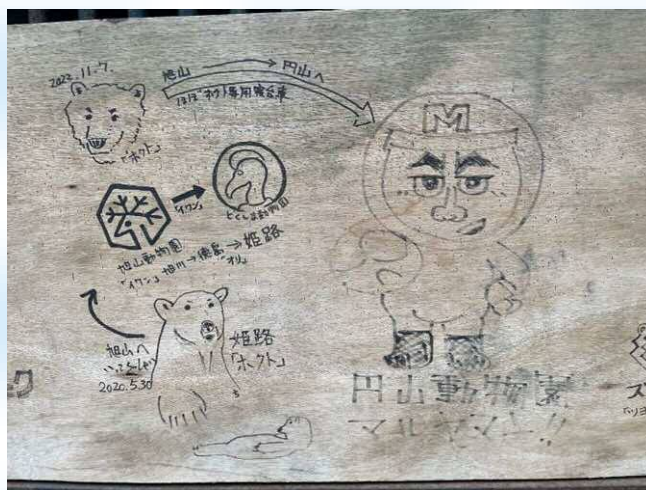
みなさまもヒナたちのように
飛躍の一年になりますように。

ホッキョクグマ ホクトの来園

円山動物園サポートクラブのみなさま、こんにちは。ホッキョクグマとアザラシ担当の鳥居です。
今回は新しく円山動物園に来たホッキョクグマのホクトについてお話しします。

1 経緯

ホッキョクグマは、日本の動物園水族館で飼育されている動物の中でも特に守ろうとしている種です。日本動物園水族館協会は、日本国内の飼育・繁殖状況を見ながら、飼育しているホッキョクグマの繁殖計画を立て、全国の動物園水族館がそれに協力して、今まで飼育展示してきました。今回、この繁殖計画のもと、旭山動物園で飼育していたホクト（雄、22歳）をリラ（雌、8歳）の繁殖相手とする計画が浮上り、円山動物園はホクトを受け入れることになりました。



ホクトが乗ってきた輸送檻に書かれた輸送の軌跡

きっかけは、旭山動物園でホクトとピリカが繁殖に成功したことです。雌のホッキョクグマは通常約2年は育児に専念し、子別れをした後に次の繁殖を行います。そのため、繁殖を終えたホクトは、ピリカの育児期間中、旭山動物園では繁殖することができません。そこで、輸送のストレスがそこまで大きくない近隣の動物園で、繁殖施設も整っている円山動物園が選ばれました。ウラ・デナリの第2子であるピリカのおかげでした。

2 来園

旭山動物園の担当者と調整し、2022年11月7日に来園することが決まりました。搬入は、一旦、旧世界の熊館（以下、「熊館」という。）



搬入日のホクトの様子

に搬入してから、熊館からホッキョクグマ館へ移動することになりました。そのため、移動経路中に不具合がないかどうか扉1つ1つ確認して修繕作業を進めていきました。また、ホクトが通る想定で、デナリとウラを収容してシミュレーションを重ねていきました。

しっかり準備をし、輸送当日の朝、旭山動物園にてホクトを輸送檻に入れる作業が始まりました。旭山動物園の皆さんののおかげで、予定よ

りも1時間ほど早く出発することができました。短い距離の移動ではありましたが、当園の獣医師と担当者も同行しての輸送です。円山に到着後、こちらの予想に反してすんなりと輸送檻から展示場に出てくれました。麻酔の影響はまだ残っていましたが、非常に落ち着いた来園でした。

3 ホッキョクグマ館への移動

ホクトが来園した翌日、さっそく熊館内の移動を行いました。この移動も予想に反し、スムーズに行きました。途中、デナリとララがいる部屋を通過しましたが、扉1枚越して少し挨拶する程度でした。ホッキョクグマ館への最難関は、裏側の通路でした。裏側の通路は、展示場・屋内の部屋から見えにくい場所にありま



ホッキョクグマ館で牛骨をくわえたホクト

す。ここは予想以上にホクトが移動せず、約1週間かけて環境に慣らしていきました。最終的には、リラを通路まで移動させて、ホクトに裏側の通路を認識してもらう方法を取りました。この作戦がうまくいき、ホッキョクグマ館への移動に成功しました。

4 ホッキョクグマ館での生活

11月23日にホッキョクグマ館の展示場で展示を開始したホクト。初日は、22歳という年齢もあってか落ち着いた様子で展示場を探索したり、プールの深さを確認したりしながら過ごしました。そこから、非公開のサブ展示場で土まみれになり、展示場のプールできれいになるルーティン。12月に入ってからは、屋内と展示場の行き来を自由にさせ、外の岩の下や雪の中に餌を隠されていることに慣れてきたなという印象でした。

ホッキョクグマ館での生活に慣れてきたら、次はリラとの繁殖です。ただ、リラはこれまで母親のララ以外のホッキョクグマと会ったことがなく、臆病な性格。どのように繁殖を進めていくのが

リラにとっていいのか、前担当者やベテラン職員と協議しながら決めました。

現在、2頭は少しずつ距離を縮めています。今後の2頭の変化を楽しんでいただけたらと思います。



ホクトが気になるリラ



同居中の2頭の様子（同居3回目）